

雑詠日記

海蝶息音

卷の二

二〇一六年

谷川
修



雑詠日記の名を「海蝶息音」と改めて二年目に入った。これが続いていることを幸いと思ふべきなのだろう。書きとめる雑詠にいつこう向上は見られないが、ただ、日々の生活に色どりを添えてはずみをつけることには役立っている。体を活動させるのは、もっぱら園丁として果樹を育て野菜作りを手伝い、たまには家の傷みを防ぐ防腐・防錆剤を塗るくらいで、あとは、急ぎ足でさまよい歩くことがあるだけの生活をしている。頭を働かせる方は、書を読み雑念を書きとめることを少々。こちらは、小さな字が読みづらく、ピントがぼけて書く字も乱れがちというありさま。すでに老人がいつそう老けるといふ事象を体験している……と、ぼやいても事態は改善しないから、エピクロスの勧告の一つを励ましとしよう。

われわれは、旅の途上にあるかぎりには、これまでの道よりも、これからの道をより善いものとするように、努めるべきである。そして、旅の終りに達したときには、いつもとかわらず明朗快活であるべきである。

一月三日
新年の骨董市は覗きこむ中古の人を品定めする

一月八日
ホオジロが鳳凰のごと石塔の頂に立つ小さな庭の

一月九日
中世の歴史見つめた慧眼に今見抜かれる頽廢の世と

一月十一日
「冬の日の幻影」

盛り上がった岩盤がむき出ている向こう側に竜宮があるはずで、竜宮の一方の曲輪が海面にせり出して潮を吹き上げ、威嚇するのが常なのだが、冬の荒波で名高いここで、今日は大蛤も眠っているのか、海の都のかけも現われず、曲線の周縁を描く水平線まで、白波の見えない海が広がり、岩盤のこちら側に雑草が伏すのを許されて、さらに、背を低めた雑木たちが傾きながらもなんとか立っている中を、赤いムカデが体をくねらせて斜面を登っている。看板が言う、今から六十年前、といえぼすでに文明の世だが、ある夜一人の住民の夢枕に立った白狐、竜宮の神々とどんな因縁があるのか、我を祭れば靈験あらたかならんとのたもった。そこで、赤い鳥居を、一つひとつ立てていき、それがリズムをなしてこうなった、その風景を、

遠い文明の国のニュース社が、この国の名所三十一か所に数えたら、老若男女が訪れて、ひととき大きな一の鳥居の上に置かれた小さなかごに、みごと硬貨を投げ入れて、幸運を得ようとするようになったとき。

首をかしげてさまよい行くと、柵田百選に選ばれたという

海から立ち上がる斜面に出た。一つきりの小さな明神池だけを

頼る柵田は冬枯れて水もない、その階段を下りた向こうには、満々の

水を湛えた海が広がる。ここからも、海市も竜の宮殿も見えないし、

稲を荷った神が海を渡って来る姿もない。夏の夜を飾る漁火も、

それをことほぐカメラを乗せた三脚も並んではない。

狐の靈力はここまで及ばないのか、

そういぶかしく思っているうちに、かの楊貴妃の里に出た。白く輝く

楊夫人はふくよかな容姿も誇らしげに立ち、李隆基皇帝の姿は見えないが、

十畳に余る華清池がある。だが冬のこととて蓮の葉は朽ちかかり、

ここはさびしい寒村で、馬鬼でもあろうか。よく見れば、主上の貴妃の

肌は大理石のようになめらかだが、とても冷たい。かの地にも

夫人に似せた像が立っているそうだから、もしかしてまぼろしが立ち現われたのか、中華帝国駐日大使の身元保証の書があるけれど、仙郷のような離宮庭園の楽しみはいつまでも続きはしない。

別れの恨みを長く引きながら夢見心地の道行に、ふと前方を眺めれば、黒緑色の列車が、海の迫るやまかげの、電気の架線もない鉄路を行く、数十年來そんなに長い列車の走ったことはないのに、まだ夢幻の中なのだろう、鉄路に沿うあちこちに、ぞろぞろ人の影までが、肩にはカメラのついた三脚をかついでいる、三本脚はこちらにきていたのだ、それにしても、この浮遊する人々と長い列車はなんなのか、うらぶれた駅停まで見にいけば、客車の暗い窓のうちには、貴顕淑女の顔々があり、窓の外の片隅に「とわいらいと・えきすぶれす」の文字がある、ああ、まだ真昼だがすでにたそがれ、夢か賢治の童話の中で、いつのまにかわたしまで、この場の影の一つとなり、まぼろしを真と言えるかどうか知らないが、携帯電話で写真を撮っていた。

撮ったつもり映像は、この幻想をどのように記録するものやら、

零と一との乱雑な並びをながなが連ねても、いつかいつたいだれがそれを映像と、いや、現実にあったことかどうかを、読み解くものやら、一と零とでどんな意味を紡ぎ出すことができるのか、その長い長い車列は、銀河の中を、どこまでも果てしなくうねうねと進んで行くのだろう

一月十八日

人間の残虐非道、映像で夜ごと眼にする、われ未熟なるヒト

二十年前のNHK制作「映像の世紀」がわたしを釘づけして吊るす。

一月十九日

「映像の世紀」観終わり現在が過去と断たれた時代だと知る

最終集のおしまいの方に大阪万国博覧会のようにが一瞬映された。それを観て、その時代も完全に過去となった、現在がわたしのような前代の人間に脈絡のない動きに見えるのは当然だと思った。しかしわたしは、万博さわぎになんの関心ももたなかったことを想い出す。ただ歴史を見つめる。

一月二十日

大寒を身にしみこませ葬送の血縁地縁死を学び立つ

一月二十五日

慈しむブルーベリイ撃つ軒の雪

二月一日

青鷺独り冬の終わりに物思い

二月五日

旧暦のみそかを前に火を燃やし海辺に立つて夕べの祈り

二月十二日

宇宙という時空の法がかすかに姿を見せたぞ、

そこにある微細なモノよ、変転きわまりない移ろいのなかで
須臾のあいだ命なる不思議にあずかる者となつた時には、

その不思議を、永く、よく味わえ、

また、山河となり、海となつた時にも、

宇宙の微塵となり、輝く星の中にある時にも、

万有の力に引きこまれて暗黒の深みへ進む時にも

いずれの時にせよ、波音を聴くあかつきを期して、

時空とそこにあるすべての微細なモノを称え、

運命によつて経めぐるよろずの事象をことほげ。

とうとう重力波が観測された。ちやうどウエルギリウスの農耕詩を読み

終えたばかりで、ムーサがわたしに宿るなら、尽きない賛辞をもっと連ねて宇宙詩を記すべきなのだ。

紅梅とわたし聴き入る重力波見えない星の衝突の音

わが海の波急ぎ足寒戻る

二月十七日

青鷺が連れ合いを得て梅開く

二月二十五日

春寒をすなどり舟の動く朝

二月二十六日

花の芽を数えて移る季節読む

桜桃、李、桃、梨、林檎

三月一日

桜桃の蕾驚く今朝の雪

三月三日

台本で質疑応答大舞台

(床屋で、美しい日本国の国会中継)

三月四日

春の野で目覚めた人の教え聴く

三月七日

蓮の花求め汚泥に手を入れる

三月十一日

咲き初める馬酔木の鈴を打つ霰

銀行に半旗、春の日和雨

三月十五日

仰ぎ見るほころぶ李花と七日月

無冠ノ田夫、多少ノ愉悦

青蓮の鉢を陽当たりの良い場所に移した。J・オースティンの描くコリ
ンズが牧師館を管理するのを誇りとし満足しているように、わたしも、わ
が寓居と果菜園荒地で精を出して時を費やす。毎日のようにご機嫌伺いを
しなければいけない人はない代わりに、心を活発にする機会も少なく、
啓発してくれる人もいないことを危惧しなければならぬのではないか。
陶潜やモンテーニュや良寛は、実際には、「晴耕」にならずみ過ぎることが
なかっただろう。果樹や蓮の花々に執着しすぎてもなるまい。

四月二日

聴聞す虫の羽音や春うらら

四月五日

鶯と歌い鳥のエンドウ打ち負かす

ランドセル買ってもらった子と話す太平の世かここは荒畑

四月六日

首ねっこ痛くつねられ虚空見て大の男が音をあげている

四月七日

ウィルスが神経回路に侵入し信号打たすキリキリと

(带状疱疹)

四月十二日

気塞ぎを林檎の花を見て晴らす

四月十三日

外郎の店にはなやぎ山つつじ

四月十四日

野兎が轢かれて命散らす春

山まさに気高い藤の花開く

四月十五日

少年はひと夏に観た出来事でヒトという種の生態学ぶ

侯孝賢の映画『冬冬の夏休み』を観た。

四月十六日

都督府の礎石むなしく幾年の春の美空を支えて在るか（九州、地揺れる）

四月二十二日

芍薬の気品に学び腰叩く

数百のバラボラとなり大和バラおぼろの月の光集める

未明の震度五の地震にうろたえて腰の筋を違えてしまい、いまだにしゃんと歩けない。ほめ言葉に満ちた芍薬をうらやむ。午後、脳にある鏡の視神経への圧迫の有無を調べるために視野と視力を検査。ものの見えない者の視力は前から〇・一。網膜の裂傷痕も念のために検査。全開した瞳孔はまだもとに戻っていないので、弥生十六夜の朧月はいよいよおぼろ。一重の薔薇の花たちと静かな海が、その慈光を反射してわたしの眼をいたわる。

四月二十四日

白ばらが月の光を晶化した清らかな靄わが海籠める

五月一日

ホトトギス鳴いて若葉の山狂う

鯖島と海見る駅で鯛のあら食べて五月の歓喜味わう

五月三日

夜来風残一李果

九十九失不絶望

明日老蝶遊橘花

荒地園満豊穰想

五月九日

老シテの速歩、チドリがいぶかしむ

五月晴朗の日

五色の旗五月の光る海を見る、今日の鯨は遠く回遊

五月十五日

日の下で地に腰下ろし日を過ごす心を空けて氣息を正し

五月十六日

園丁に有絃の琴、用如何

先日、細君の得た古いギターに絃を張ったが、兩人とも元来弾けない。

かの人の無絃の琴に似せても、奥義に達せないだろう。午前、石川忠久著『陶淵明とその時代』をひもといた間に、風雨、白桃の天果一つ落とす。

五月十九日 剛力が一人で植える農の時

五月二十四日 椎揺れる卒寿の人の五月の田

弟を亡くした従兄は草刈り中、家号が北隠居の隠居は一町の田を耕作。

五月二十八日 春熟れて今日は巧みな庭師の日

目覚ましい事の無い日々園丁は草木相手に人の生成す

五月三十一日 自らの作務の一つの剪定で息切れするな老園丁よ (海が見えるように)

六月五日 生き急ぐ秋桜三子植え替えてリビングに置く梅雨を永らえよ

六月曇天 「江村無事」 また陶集に学ぶ

靄靄たる漂煙

静静たる内海

対岸では草を焼く

丁は既に枝を剪る

蝶の蛹を孫に送り

小心 李を慈しむ

朝 東軒に佇めば

願ねがひに言ことに事も無し

(一本に「李を包む」とする、袋かけか)

(一本は「日に無事を願う」につくる)

童児も来て時に遅れる降誕会

六月十二日

午睡から覚めれば客の小狸が浦の庵のあじさいの下

六月十三日

江村の径みちに妻抱く蟹と会う

この浦には異類も棲む。パートナーを抱えて運ぶ赤手蟹の新居はどこ？

老夫二人勞をねぎらい草退治瑞穂の国の退廢背負う

六月二十一日

時隔て父母の形見のスモモ食う

(三十歳になるこの木の実を初めて)

満ち潮を蚊を遣る兜脱いで見る

(一か月来、海は凧いで夏を織っている)

六月二十五日

陶詩「連雨独飲」讚

睡蓮が白い花を開き

蓮の葉は蝶を招いて揺れる

(まだ花茎のない蓮の華は紋白蝶)

連雨は暫く休止

遠い国の動きに耳を傾ける

「陶淵明という人」を思索して、淵明の転機は四〇二年から四〇四年の時期にあり、母の喪の明けた四〇四年に何をしていたか、何を望んでいたのかと考えていたら、この詩がちょうどその頃に詠まれたことを知った。政変と戦乱を観ていた彼は、人生を考え、宇宙のうちにある自己を見つめていたのだ。わたしは、英国の国民投票が欧州連合離脱を決めたのを聞き、世界が流動化し多難な時代になると思いながら、小さな庭を見ている。

六月二十六日

数十騎まだ早苗田の風を切る

六月二十七日

六月の雨が休止し

海市はもうろうと眠る

ここはかつて内外に開かれ

使節や庶民が船に乗った港

わたしは過ぎ去った旅を顧みる

行人の思いはどのようなものだったかと

もし今 再び海に浮かべば

あれこれの望みは果たされるだろうか

揚羽蝶を育てていたのに小蜂が出てきた。孫二人とあっけにとられ、

生き物は思議し尽くせぬ者と知る

七月一日

西瓜食う烏帽子の者よ時を待て

七月三日

三味線と太夫八人心中を力を込めて歌う不思議さ

七月九日

「心中重井筒、道行血潮の臙染」を素淨瑠璃で聴いた。長い間上演されていなかったのを復曲したばかりで、これが初演だそうだ。解説した文楽座の座員がこれを音楽のうちに数えたから、それに同意しておこう。近松門左衛門は、世間が心中事件のうわさでもちきりのうちに戯曲を書き上げ、これから心中しようとする二人に自分たちのことが狂言の台本に載るだろうと言わせもする。劇作家の面目躍如たるものがある。人形が登場することかと感心してしまう。場面の設定に無理なところがあるけれども、使い手が三人もつく人形が演じている舞台だもの、ともかくこれらの人形を脳裏に映しとり、聞きとりのむずかしい義太夫節から人情の機微をくみとれば、遊女のけなげさに涙することができる。ふたたび、こういう演劇が日本人の言動や情動や美意識に共鳴してそれを増幅したのだと思う。

朝爽弘雲霧

鏡水浮一船

航跡如筆法

隨時開撓扇

夕陽照東山

空海湛平安

叢中採桔梗

清氣入閑庵

反歌 螿螂の稚児花と入る籠り堂

七月十日 白昼に平安捨てる多数決

七月十七日 梅雨の雲が退いて陽射しのある午前、

鬼百合に蜻蛉がとまり、彼らが影を映す
 小さな池に機械仕掛けの遣水の音が響く
 花の粉に指を赤く染められた白い禿頭に
 怖い鬼の心にあつたやさしい思いが浮ぶ

ヴァイトゲンシュタインの『ラスト・ライティングス』を読み始め、解説に引用された「個々の考えや個々の想像ないし記憶に対応するようないかなる種類のコピーも生理学的なものや

神経系には存在しない」という文が、次のような思索を促した。——おおよそ知られるようになった神経系（脳に中央演算機構をもつ体中に張り巡らされた神経回路網）の構造からして、そのつどの静的な心的 \parallel 生理的状态が存在するのではないだろう。ある心的現象として出現するものは、対応物として神経系の一つの限定された状態をもつのではなく、限定できない多重的な神経系の作動のなかで一つの論理系として意識されたテーマである。それは、物理学に出る経路積分にいくらか似た働きなのだろう。全系にはそれに関連するあるいは関連しないさまざまな論理系が潜んでいて、それらはさらに複雑な論理系を構成可能なだろう。その多層的な働きは、人間が生きているときだけ生じて、「生活の流れのなかで意味」を見つけてテーマ化したものを出現させる、そして、神経系と身体とは不可分な一体である——と。

シーソーの上のピエロも暑さには倦んで静し蝸牛と花と

七月二十日 海を見て蝉とうそぶき今日を期す

七月二十三日 時待って智者の桓公攻め寄せる
（ほぼ熟したのを一つやられた）

七月三十日 土潤わず星のかなたの風を待つ

八月八日 旱天に耐える紫式部女史、園丁せめて水を捧げる

八月九日 旱天が今日は七夕と証する

八月十日 盆前に手植えの桜渴き果て枯葉を散らす父母の墓の上

旱天に蛇も衣を脱ぎ捨てる

八月十四日 次々に渴して落ちる栗無惨

水求めコオロギ指にすがりつく

(四週間雨が降らず連日水やり)

八月十五日 老騎士は蜂の城塞攻め落とす

(愛用の兜をかぶって)

八月十九日 居庸関越がてに行く海の蝶

八月三十日 稲刈りを前に汽水が堰過る

九月三日

Walker青大将に足すくむ

夕方、小さな大歳神の祠のある海岸道路の端まで散歩したら、防波堤から蛇が下りた。台風を前に、道に沿う防波堤の数十メートルおきに開けた開口部が閉められている。その堰は高波を防ごうというのだろう。しかし、わが家の南側の路地下には集落の中通りの側溝から海へと排水溝が埋めてあり、排水口は海岸道路よりもかなり低い。一年で最も潮位の高い四日前の満潮時、側溝まで流れ込んだ海水が道路面まであと三十センチメートルだった。台風で高潮になれば、中通り側にあるわが家の玄関の前は潮水で洗われるだろう。龍神が祠の草むらに隠れ、内海は凪いで波一つない。

九月六日

国勢の図会見て国の秋を知る

暦の写真すでに黄葉

九月八日

茅・蔦と悪戦をする世とはなる

九月十二日

卵焼く傍に幼い竈馬

(翅が無くて飛べないのはわたしと同じ)

九月十三日

雨に秋、黄海と化す背戸の海

中秋に尾花を切つて花とせず

涼しくなつたので荒蕪地の匪草の掃討作戦。根こそぎにはできなかった。当家にはサンチョ・パンサがないので刀自が従軍。

九月十七日

紅白の萩と海見る丘の墓

中秋の満月を待つ梨の花

四、五日留守にするので墓掃除・墓参り。毎週土曜日に新聞に掲載されるアンケートの質問が今日は「生まれ変わりを信じるか」。千八百人の回答の三割が「靈魂の不滅を信じる」だったそうだ。残りの人々の何割が彼岸の墓参りをするのだろうか。春分と秋分に太陽が真西に沈むのことによせての日本だけの風習。本日は太陰暦八月十七日、月齢十五、夕方から雨。今年の天候もおかしく、名月にこがれた梨の木が花を狂い咲かせた。

九月三十日

石切つて時を費やす九月尽

池の水が抜けるようになった。目につくひびに充填剤を塗っても効き目

十月三日

がないから、地中の排水管で漏れるのか。金魚を川に捨ててに行くのも不憫なので、漏水を防ぐ工夫を考えて、ホームセンターで見つけた中空のブロックを池の底の排水口に立てることに。だが、そのままでは水面が睡蓮の鉢よりも高くなり、池にアオコ退治の薬を撒いたら睡蓮も枯れるだろう。そこで、手引きの石切り鋸を買ってきて工事。ところが、満たした水の水位は下げどまらず、目論見は水泡に帰した。排水管から漏れるのではないのだ。結局全面に防水セメントを上塗りし、金魚が池に戻ったのは十一月。

緑の玉ゆつくり浮かびコスモスを生けた書齋に静やかな秋

秋晴れや、蛇・人出会い肝つぶす

十月十日

秋気吸い生命を継ぐ者がいる、わたくしという散逸構造

空泳ぎわたし見下ろす鱗雲

十月二十日

つわぶきの花生けて聞く雪だより

十月二十一日

観月の季節も過ぎて広縁に防腐剤塗り巡る時待つ

十月二十六日

羽化できぬ蝶はせめても防腐剤塗って不朽の空室残す

十月三十一日

松を見て松のいのちに耳すます
風もなく命のうごき見えず在る

十一月四日

海風いで秋の名残の夕陽浴び物憂い声の鳴が歌う

十一月九日

全面を修理した池水清く北風しぐれ金魚に試練

十一月十日

脳内の鏡を透視することが歳を重ねる節目の行事

十一月十一日

名女優逝って一年追悼の映画の余韻黄葉揺らす

主演の原節子をスターにした映画『安城家の舞踏会』を観た。

後日また来福して二十四日、今度は名作の名の高い小津安二郎監督の『麦秋』。登場人物たちは騒がない。寒さが黄葉や紅葉を散らして路に敷く。

十一月二十七日 しぐれ止む田に青鷺と白鷺と老シテが立ち情景つくる

十二月二日 時見つめ未だ小春を残す世に (自然の、時代の、人生の時の中に在る)

十二月三日 島崎藤村『夜明け前』、半蔵が寺の障子に火をつけた。

澄む空に五日の月と明星が何事もなくわが生と在る

十二月四日 山茶花を散らし雨降る池にあり命をつなぐ金魚見つめる

雨で暮れる冬の露天に息を継ぐ

市営温泉につかり、雨にけむる穏やかな冬の海が湾の奥から平地を越え山まで浸しているのを眺めた。まだ大作に没入したあとの気分が残る。

十二月十四日

アレッポの瓦礫の下の血の匂い

(まだ嗅ぎ分ける力が人間にあるか)

十二月十七日

聞きなさいインカの言葉響くのを入住む星の歴史の歩み

ペルー、土地の人四百万人に母の言葉クエンチュアで放送開始。

十二月十八日

樁手に風ぐ海の鶉の暮らし観る

十二月十九日

渚から沖へと泳ぐ鴨の群れ巧まず描く幾何学模様

タイヤを冬用のものに変えに行つて、日ごろ見ている湾の奥の海沿いの道を散歩した。ここから眺める湾はいっそう湖のよう。今日は上天気で波ひとつない。こつこつした石ころの多い渚の近くまで来たら、人影を見つけたかなりの数の鴨が岸から沖に向かって引いていった。あわてず泳ぐので、それぞれの鴨を頂点にして、静かな波が三角形の二辺を描いてうしろに広がる。その光景はカメラを携えていないことを残念がらせる美しさ。こうして二〇一六年が何事もなかったかのように終わろうとしている。ガレージに帰つて、冬用タイヤは当分要らないと思えるほど穏やかな天気だと言つたら、峠の南には先日ロシア

の大統領が来た日に降った雪が道路わきに積もっているということ。すでに変動期に入っているのではという危惧の正否が明らかになるのはいつだろうか。

十二月二十三日 甦る日を言祝いで虹と立つ

十二月二十五日 松の枝求めて登る丘の上、ここはみすずの公園で、

見下ろす海は冬忘れお船と昼寝、小さな竹も三本伐って、
藪に咲く赤い椿を華やかに、門の飾りに挿し足せば、
よい正月を招くでしょう、つまらぬ呻吟おいといで、
さあもう一度海を見て、みすずの歌を歌いましょう。

十二月三十日 身を容れる車を洗う小晦日

身も洗い心も洗い百八の鐘の染み入る者つくる作務

十二月三十一日 空と海と地と、四方を見晴るかす千畳敷山上、宇宙∥空間・時間に在る。

この年のすべてを過去に大風車

二〇一七年 正月
白江庵 謹製



『ブツダが説いたこと』 W・ラーフラ

ゴータマ・シッタールタ

「自らが自らのよりどころであり、自分以外の誰をよりどころとすることができようか。意識は条件から生起し、条件のないところに意識は生起しない。」

「意識は、物質を手段とし、物質を対象とし物質に依拠して生起し、喜びを求めて成長し、増大し、発展する。」

ラーフラ師の註

へ心は、物質に対する精神ではない。
へ心は、機能、あるいは目や耳といった器官にすぎない。

